

華やぐとき

芝木好子

華^{はな}やぐとき

定価一、六〇〇円

著者——芝木^{しばき}好子^{よしこ}

編集人——杉林 昇

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
千一〇〇一五五
大阪市北区野崎町八の一〇
千五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一
千八〇二

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大日製本印刷株式会社

第一刷——昭和六十二年十月十四日
第二刷——昭和六十二年十月三十一日

ISBN4-643-87074-5 C0095

© 1987, Yoshiko Shibaki

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

華やぐとき

目次

折々のこと

- 東京散歩 9
華やどとき 13
春の下町 15
陶磁の美 19
地唄
舞「雪」 24
歌舞伎的一幕 28
春の味 31
母 35
羽子板 39
青春の坂道 44
葛飾の文学碑 59

旅のたのしみ

- 小説に出てくる町 67
奈良の旅 京の旅 73
長崎くんち 80
北
の旅 86
港が見える 92

異国の情景

- 鏡の中の顔 101
旅に想う 103
旅の出会い 107
パリの夏 113
魔の時間 140
女の旅 121
パリの日本人 129
からゆきさんの墓 134

読書と私 147

近況 ¹⁴⁹ モームとシंगाポール ¹⁵² ドストエフスキーと私 ¹⁵⁵

読書と私 ¹⁵⁸

ふれあい 167

三岸さんの絵 ¹⁶⁹ 萩須画伯とタピストリー ¹⁷³ 中野好夫先生と

の御縁 ¹⁷⁷ 牡丹の思い出 ¹⁸¹ 野上彌生子先生を偲んで ¹⁸⁶

萩須先生の面影 ¹⁹⁴ 円地文子さんを偲ぶ ¹⁹⁸

あとがき 203

初出紙誌一覧 205

装画 大柳久栄
装幀 中島かほる

華やぐとき

折々のこと

東京散歩

風の爽やかな季節になると、もの書きの私は机の前を離れて清々せいせいとするところへ行きたくなる。二年続いた仕事の終わりがみえてきたので、そろそろ旅が出来る、とそれがたのしみで、時には世界地図をひろげて眺めている。若い時は二つ三つの仕事を同時に進行させて、仕事の区切りには自由に旅行をしたが、今はくたびれてしまつて、そうはゆかない。

長いこと向きあっていた小説の世界から気持ちを切りかえて遠くへ旅をするには、心の支度があるようになった。今度はどこが良いか、トルコのイスタンブールや、イタリアのアドリア海に面したヴェネツィアはどうかと考えるのは、塩野七生さんの

『コンスタンティノーブルの陥落』や、『海の都の物語』を読んだせいである。プランをたててたのしんでいるが、ヨーロッパの情勢は不安定で、エーゲ海や、地中海の近くをのんきに旅行するのもためらわれるようになった。

外国の都会のまんなかや、空港に爆発物がおちる。死の灰が降る。余計な旅行をとめられたようで、しゅんとなってしまう。旅の終わりにはパリへ寄ることにしていて、知人たちとお互いの生きる姿をたしかめあうはずであつたが、どうなることか。

この頃は、風に誘われて東京の町を歩くようになった。ごみごみとした下町に行くのも結構好きだし、水辺のあるところ、墓地も良い。新宿御苑へは時折ゆく。御苑の中は広大だが、私の歩くのは見事なプラタナスの並木の一画で、平日の人のいない時のぶらぶら歩きである。バラ園があつて、大きな落葉樹の整然と並ぶ趣は、西欧の公園へまぎれこんだようである。季節ごとに表情があつて、新緑のころは若々しいし、落葉のころは情趣がある。プラタナスの大きな葉が黄ばんで風に舞い落ちてきて、地面に散り敷くさまは蕭条しやうじょうとして、心にしみる。これからの時期はバラの花が咲くので、目をたのしませてくれる。花を見ながら大樹の下ベンチに掛けていると、東京の町中かしら、と思うほど静かで、心がやすらぐ。

ある時、ベンチの一つに中年近い男女が掛けていて、こみいった話らしく女性のしおれているのを目にした。そのうち話はすんだとみえて、男にうながされて立つと、並木の下道をふたりは去っていった。つらい話かもしれないが、自然の情景の中で、彼らは静かにふるまっているを感じた。都会の人間の、束の間の哀歓を見ようだった。

プラタナスの下を出て、私はそのまま帰ることもあれば、御苑の池をまわって散歩することもある。この間は白木蓮の大き木がゆれるばかり満開で、花燃えているのを見て、感動した。新宿御苑の元の持ち主であり、高遠城主の末裔であるN氏と、国立劇場のロビーでお会いした折、

「昔はお殿様ひとりのお庭だったのですね」

と、いささか冷やかしか気味に申し上げると、私の御苑散歩を知るN氏は、微笑して、

「いつも、ありがとう」

そう言われたのだった。

散歩の足をもう少し伸ばして、浜松町の竹芝桟橋から、隅田川を渡る水上バスに乗

ることもあるが、今は発着場所の東京湾の眺めが私にはよくなった。

それも夕ぐれ時、高層ビルディングの中の喫茶室の窓から、暮れなずむ情景をみるのがいい。空と湾とが浅黄色から濃紺に刻々と染められてゆくのはすばらしい。灯が瞬きはじめて、大島へ行くのか大きな船が出てゆくのか、隅田川から下ってきたタンカーが漕^みを引きながら滑ってゆくを見ると、旅情を誘われる。港や湾は、私の長い人生で幾度か見てきたところで、地中海のきらめく湾や、北欧の澄んだフィヨルドの海や、メキシコ西海岸の小さな港の荒れた波頭を思い出す。それらと比べても、東京湾の豊かな眺めは悪くない。

東京湾へは隅田川がそそこみ、荒川や、江戸川の流れも合わさって、海へと出てゆく。海を抱く港の景色はどれも似ていて、夢と、死とに、結びつく。長い旅に出る時や、旅の間、これが最後かな、と私は内心想うようになったが、相なるべくは旅を続けて持ちたい。

日没のあとの、夜の湾を眺めながら、放心している一ときは、贅沢な時間といえるかもしれない。

華やぐとき

東京の下町を流れる隅田川には、上流の白鬚橋からかぞえて、東京湾近くの勝鬨橋まで、十二の橋が架かっている。

一年に一度くらい、私は竹芝棧橋から水上バスに乗って隅田川をゆく。季節が春めいてくると、船は結構こんでくる。川の流れはきれいとは言えないが、一時期のような臭気はないから助かる。水上バスはエンジンの響きを立てながら、大川の橋の下を次から次とくぐりぬけ、浅草の吾妻橋まできて終わるのである。

浅草生まれの私にはこれという目的もない東京散歩の一つで、駒形橋から吾妻橋へかかると、自分の家のあったほうへ目がゆく。数えて二十歳まで暮らした家はむろん

なくて、町も戦災のあと変わってしまったが、川だけは変わらずにゆったりと流れる。外国のどんな都会も川は大事な顔になっていて、情趣をそえている。東京の川も大切にしたい、と思わずにられない。

いつだったか、夕ぐれに人と柳橋から屋形船に乗って川遊びをしたことがある。いなせな船宿の主人の案内で、おかみさんが見送りにきて、

「いつてらっしゃいまし」

という。

屋形船は上流へと向かっていつて吾妻橋をくぐると、暮れなずむ空の下、右手に墨田堤が見えてくる。そのうち左手には待乳山聖天のお堂や、今戸橋の水門が現れる。少しずつ紫紺色に染まる隅田川は、昔のようにだるま船はなくて、石油を運ぶタンカーがゆくのである。上げ潮の川波がゆれるだけの静かな一ときだった。白鬚橋まできて、ゆっくり引き返してゆく。

屋形船には風情がある。舷よなべりで川風に吹かれていると、船頭さんの操るモーターが櫓ろに見えてくる。こんな時私は、船の内に小説の中の男と女をおいて、川音を聴いているのである。するとゆめがひろがってゆき、心が華やいてくるのであった。